

# おかえり 筑後

九州芸文館  
芸術文化交流拠点性発揮事業  
筑後アート往来

アーティスト・イン・  
レジデンス“再会”展

2018

4/27<sup>金</sup> → 5/6<sup>日</sup>

※4月27日開館5周年記念日 ※5月1日(火)休館日

九州芸文館 教室工房1・2、エントランスギャラリー

10:00-17:00

入場  
無料

2015年から開催してきた九州芸文館芸術文化交流拠点性発揮事業(筑後アート往来)で滞在制作(レジデンス)をしたアーティスト5人が再度この地にあつまり、作品を発表します。アーティストが制作するとはどういうことなのか、その人生や制作活動にとって滞在制作はどんな意味をもつか、感じ考える趣旨の展覧会です。九州芸文館5周年企画の一環として開催されます。会期2日目には参加アーティスト4人によるトークも予定しています。



1 武内 貴子 [日本・福岡]



2 キム・ハンナ [韓国・釜山]

主催：九州芸文館芸術文化交流拠点性発揮実行委員会  
キュレーター：シム・ウヒョン(九州産業大学造形短期大学部)  
コーディネーター：宮本初音(ART BASE 88)  
協力：釜山文化財団、MEIJKAN、WATAGATA Arts Network、久良木 壽啓、久良木 一女 ほか  
お問合せ：九州芸文館 TEL 0942-52-6435 〒833-0015 福岡県筑後市大字津島1131  
<http://www.kyushu-geibun.jp> <最新情報> <https://www.facebook.com/chikugoartourai/>

会期中  
イベント

アーティストトーク「筑後でのレジデンス経験について」

武内 貴子、上岡 ひとみ、カム・ミンキョン、ピョン・ジェギユウ

4月28日(土) 10:30-12:00(予定) 展覧会会場内

※11時から17時まで九州芸文館芝生広場を中心に5周年記念イベントが開催中



3 上岡 ひとみ [日本・埼玉]



4 カム・ミンキョン [韓国・釜山]



5 ピョン・ジェギユウ [韓国・釜山]

- 1 《結ばれる飛白(かすり)の情景 — indigo scenery》(部分) 2015年
- 2 《100年ぶりの引っ越し》(一部) 2015年
- 3 《undercontrol》(部分) 2016年
- 4 《もしかしたら、青い花ではなかったか?》(一部) 2016年
- 5 《残骸のための哀歌:クスノキ林》(一部) 2018年

※1~5は、これまで九州芸文館で発表された作品  
(今回の出品作品とは異なります)

アーティスト・イン・レジデンス（芸術家滞在制作事業）は、世界各地で盛んに取り組まれているプログラムである。運営する組織の形態や趣旨（民間、自治体、美術館、アーティストランスペースなど）によりテーマをもってアーティストを選出し、選ばれたアーティストは一定期間滞在し自律的な創作活動に専念する。

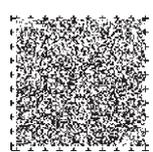
アーティストは一人で作品に向き合う一方、滞在地域のひとたちとコミュニケーションを交わし、双方向に影響しながら制作してゆく。運営組織は、バックアップする仕組みをつくり、アーティストは個人的なアート活動をその仕組みを通じて社会的価値に還元させる。このような「過程」、制作過程の記録、作品展示、一部を所蔵することなどは、レジデンスをおこなった地域の文化的な価値を高めていくことに繋がる。

今回の展覧会では、九州芸文館の芸術文化交流拠点性発揮事業（筑後アート往来）に参加した5人のアーティストが再度この地にあつまり、新作を発表する。かつて約3ヶ月の滞在の間に、それぞれがどんな新たな価値や作風を得たか、筑後の風土をどうやって作品に取り入れていったのか。滞在制作の過程から現在に至る活動状況を会場で展開し、アーティストが作品を制作していく姿勢について考察する機会としたい。

本展キュレーター シム・ウヒョン



JR.....九州新幹線筑後船小屋駅下車～徒歩1分  
JR鹿児島本線筑後船小屋駅下車～徒歩1分  
バス.....西鉄筑後船小屋駅前バス停～徒歩1分  
50番（船小屋・羽犬塚・高良台・久留米方面）  
車.....九州自動車道八女インター下車～約10分  
みやま柳川インター下車～約15分  
駐車場あり。総収容台数103台（車椅子用スペース3台含む）。詳しくは「九州芸文館」公式サイトへのアクセスページ参照



**Uni-Voice**  
このマークは、目が不自由な人などが使う音声コードです。

## 武内 貴子 [日本・福岡]

TAKEUCHI Takako [Japan] / 타케우치 타카코 [일본 후쿠오카]

2015年秋、筑後を訪れまず目にしたのは広大な平野。空が一段と広く感じました。そこで発展してきた久留米餅は、そんな筑後の風景をより強く感じさせるものでした。30以上の複雑な工程を経て、筑後の風土とともに生まれるその餅の物語を結びつなげていきたいと思いました。



1979年 福岡生まれ  
2004年 福岡教育大学大学院美術科修了  
2006年 国際芸術センター青森 レジデンスプログラム  
2014-2015年 スウェーデン 滞在制作活動 他  
◎近年の主な展覧会  
2015 紙 やどる 形 (福岡県立美術館)  
2016 Lifestyles Hamburg-Fukuoka (WESTWERK.・ドイツ)  
2017 Sub Rosa ~バラの下で~ (久留米市美術館・福岡)  
2017 Barehands (National Visual Arts Gallery・マレーシア)



《御結び》2017年

## キム・ハンナ [韓国・釜山]

KIM Hanna [Korea] / 김 한나 [부산]

私の作品の構造は、主観的経験による現実と幻想の境界である。作品に登場するウサギとは2004年に初めて出会い、今まで私（ハンナ）と一緒に日常を過ごしている。作品は一見童話的で幻想的だが、小さな物語と日常、立ち向かう悩みを取り入れて作られている。筑後でのレジデンスで制作した「100年ぶりの引っ越し」も、アーティストとして筑後に来る一連の過程と、出会った多くの人々との縁に小さな喜びを見つけて記憶していくことが作品として結実した。思い浮べると懐かしさで胸がいっぱいになり、毎年筑後を訪れることになった。



1981年、韓国釜山生まれ、釜山在住。  
2007年、釜山大学校美術学部卒。  
ウサギと作家自身を題材とした作品を制作し、韓国各地で個展企画展多数。2015年「筑後アート往来」でのレジデンス以降、新世界百貨店ギャラリーセンタムシティ、GANA Art Busan、Open Space BAEなどで作品を発表。2016年、光州ビエンナーレに合わせたラッピングバス作品も制作した。



《光州ビエンナーレアートバス》2016年

## 上岡 ひとみ [日本・埼玉]

UEOKA Hitomi [Japan] / 우에오카 히토미 [일본 사이타마]

私が強く印象に残ったのは久留米餅と茶畑と人々の大らかさだった。伝統工芸が常に新しいものに挑戦し外へ開いている。ここでは伝統は守りながら進化し受け継がれ文化となっている。お世話になった久留米餅の工房で一反の餅に隠された呪文の意味を教わった。そこに昔から変わらぬ人々の想いが込められており、胸が熱くなった。茶畑から沈む夕日を見て、その神々しさからこの土地に住む人達の大らかさに深く納得した。



1983年生  
2007年 女子美術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域 修了  
2012-2016年 ドイツ・ベルリンを拠点に美術活動  
2014年4月「大村文子基金女子美バリエーション賞」受賞  
2015年9月 笹川日仏財団より助成金を受け、フランス・パリ国際芸術都市にて、日仏交流の為の展覧会を行う  
2016年10月「アマテラス・インターナショナルミニペーパーアートコンペティション」グランプリ受賞（ブルガリア・ソフィア）  
2016年9月 筑後アート往来 アーティストインレジデンス



《KUMO-BR,BK, NYUL-1》2018年

## カム・ミンキョン [韓国・釜山]

KAM Minkyung [Korea] / 감 민경 [부산]

小学校のとき、先生が私に「生まれ変わったら何に生まれたい？」と聞いた。私は「風です」と答えた。川の両側に柳があって、その柳の下で絵を描くのが大好きだった。初めて筑後に来たとき、子どものころに見た川と柳がここにあると感じた。パノラマのように記憶がよみがえった。筑後での作品では、近代化の過程での社会、社会を構成している「個人と共同体」の多様な価値を探し考えようと試みた。筑後ではノスタルジアとして懐かしい過去と現在、個人と社会や地域など、多様な価値が風に乗って近づいてくる。



1970年、韓国釜山出身。韓国 国立釜山大学校 芸術学部 美術学科 博士修了。1990年代から韓国国内で個展企画展多数。釜山でのオープンスペースBAEやホンティアートセンターでのレジデンスののち、2016年10-12月に九州芸文館でレジデンスをおこない、作品を制作発表した。2017-18年にはドイツ・ベルリンのクストラムベタニエンにてレジデンスをおこない、個展を開催した。



アーティストインレジデンス Open Studio 03 (会場風景) 2018年

## ビョン・ジェギョウ [韓国・釜山]

BYUN Jaekyu [Korea] / 변 재규 [부산]

アーティストの空間と時間の体験は、作品という形であらわれる。映像作家であるわたしにとって、初めての場所と時間は特に新鮮な経験となった。九州芸文館で展示した作品に用いたクスノキの落ち葉は一種の媒介物といえる。過去と現在を繋げ、未来の時間を支えてくれるお守りのようなものである。矢部川のクスノキという場所から九州芸文館の空間に入って来て、作品を観た観客の記憶と経験の非物質的空間に移転していくものになるのである。



1975年 韓国釜山生まれ、釜山在住。日本の京都精華大学で映像を学ぶ。実験映像インスタレーションを制作。最近のテーマは映画装置と知覚的メカニズムの関係について。個展は2011年 Space Bandee (釜山) での「Light Cone」など4回、近年の企画展に2014年ロンドン韓国文化院、2013年韓国国立現代美術館開館企画展、同年ソウル国際ニューメディアフェスティバルなど。2011年釜山青年美術賞、2006年学生 映像コンテスト BACA-JA (パカジャ) でグランプリ、ソウル 国際実験映画祭でKT&Gサンサンマダン賞などを受賞。2018年1-3月、九州芸文館に滞在し制作と作品発表をおこなった。



《# 3\_2 / # 3\_2》(画像は映像からのキャプチャー) 2017年